

一般社団法人日本社会福祉学会第69回春季大会報告

全国大会運営委員春季大会担当
岡田 進一(大阪市立大学大学院)

大会テーマ： 認知症の人々とともに生きる地域共生社会を目指して
—認知症ケアとストレングス・アプローチ—

開催日時： 2021年5月30日(日) 13:00~17:00

会場 : WEB開催

今回、2021年5月30日(日)の13:00~17:00の4時間にわたり、WEBにおいて、一般社団法人日本社会福祉学会第69回春季大会が、「認知症の人々とともに生きる地域共生社会を目指して—認知症ケアとストレングス・アプローチ—」という大会テーマで開催されました。なお、本大会は、コロナ感染症拡大防止のためWEB開催とさせていただきます。

最初に、会長の木原活信氏より、大会開会の挨拶がありました。続いて、日本社会福祉学会2020年度学術賞受賞者講演が「子ども虐待対応における保護者との協働関係の構築—家族と支援者へのインタビューから学ぶ実践モデル」と題して、鈴木浩之氏(立正大学)により行われました。講演の中では、実践現場の声をいかにして実践モデルとして構築していくのかという非常に重要な内容が提示されました。そして、「折り合い」というキーワードを用いた鈴木氏の研究内容が提示され、実践知の体系化を、どのようにして行うのかの具体的なプロセスが示されました。

学術賞受賞者講演に続いて、「認知症の人々とともに生きる地域共生社会を目指して—認知症ケアとストレングス・アプローチ—」というテーマで、シンポジウムが行われました。シンポジストは、松本一生氏(松本診療所)、中村考一氏(認知症介護研究・研修東京センター)で、コメンテーターは、笠原幸子氏(四天王寺大学)、コーディネーターは、岡田進一(大阪市立大学)が務めました。

第1番目に、松本一生氏が、「認知症とストレングス・アプローチ:医学の立場から」という内容で、プレゼンテーションを行いました。その内容は、認知症高齢者の病識の有無、主な認知症の種類(アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、血管型認知症、前頭側頭葉変性症)とその特徴、コロナ感染症における対応、認知症高齢者に対する基本的な対応などでした。そして、医学的な見地からの地域共生社会における認知症ケアのあり方や、認知症高齢者に対するストレングス・アプローチの重要性が示され、プレゼンテーションを終えられました。

第2番目に、中村考一氏が、大会テーマと同じ「認知症の人々とともに生きる地域共生社会を目指して—認知症ケアとストレングス・アプローチ(問題提起)」という内容で、プレゼンテーションを行いました。その内容は、認知症高齢者の存在の尊重、ケア側の事実と解釈の区別の重要性、ICF(International Classification of Functioning, Disability and Health: 国際生活機能分類)の考え方、BPSD(Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia: 認知症の行動・

心理症状)の捉え方、認知症高齢者に対する対応方法などでした。また、認知症高齢者に関する具体的な事例が示され、認知症高齢者に対する理解を深めていくためには、表面的な事象にとらわれず、背景要因の分析が重要であり、背景要因を理解しながら認知症高齢者の言動の意味を捉えることの重要性が提示され、プレゼンテーションを終えられました。

続いて、笠原幸子氏が、お二人のプレゼンテーションを受けて、コメントを行い、その後、参加者からもさまざまな質問が寄せられ、有意義なシンポジウムとなりました。

最後に、副会長の和気純子氏が、閉会の挨拶をされ、無事、第69回春季大会が閉会となりました。

最後になりましたが、本大会の開催にあたりご協力を賜りました多くの会員や関係者の皆様には心よりお礼を申し上げます。